

ほくろのある女

ほくろのある女

作・中野浩作

暗い部屋。

椅子に腰掛ける女。近くのテーブルの上に、鏡、化粧品類などが置かれている。

女「(ぼそりと) わたしの唇の上に、ひとつ、ある。黒々とした、ほくろ。

ほくろ、は、人の目をどうにも、惹きつけてしまうようで。大きさは控えめだから、なにか、特別な主張をしているというわけではない、のだけれど、それでも、その、もともと血色のいいわたしの唇の上にあるということが、肌の白さとの対比もあいまって、より、強く、人の目を、引く、みたいだった。

たとえば、わたしの今までの恋人たちなどは、みんな、キスをするとき、わたしのほくろを必ずちらりと、見る。

そうして一瞬、動きを止める。互いの唇がもう、触れ合うという瞬間に。

一瞬、止まる。わたしはそうなった瞬間、舌が応でも息がかかる距離にある恋人の唇をちらりと、舐めるのが好きだ。

何かの折に、

「なぜ、わたしのほくろを見るの？」

と、聞いたことがある。多くの恋人たちは口を揃えて言う。

「まあで」

「まあで、見られているようなのだ」

「ほくろに？」

ほくろに」

鏡を見る女。

女「鏡の中に、わたしの顔がある。

わたしの肌は、とても白い。けれど、唇はとても赤い。血色がいいと表現したけれど、それは控えめな表現だ。見たまを、嘘なく伝えるならば、嘘みたいに、赤い。そして肌は嘘みたいに白い。

この白と赤のコントラストは異様はひどく作りものじみっていて、ずっと見ていると気分が悪くなる。

嘘くさいのだ。

自分の顔が、大変、嘘くさい。お面みたいだ。お面を付けて、生活をして、お面を付けて人と話す。そんな気分になる。

およそ、普通の人に比べて、ずいぶんと血色のバランスが悪い。だから、わたしはいつ

も化粧でごまかす。厚めに化粧をして、色を抑える。

普通の肌色。普通の唇。偽物の普通の顔を作る。お面みたいじゃない普通の顔だ。お面みたいな顔を化粧で隠す。二つのお面を同時にいつもしているようなものだ。いつか蒸れてきやしないかと、思う。間の隙間から汗がにじみ出て、ぼたぼたと零れるのだ。そうしたら、きつと自分の顔は普通の肌色の肌になっているかもしれない。汗で白が落ちてくれるかもしれない。そんなこと、ありえないのだけれど。

二つのお面をしているということは、自分の本当の顔を二重に隠しているということになるのだけれど、二重目の一重目は自分の本当の顔なのだから、こんな思いに耽るのはただの錯覚」

俯く女。何かを思い、ぼそりと、辛さを噛み締めるように、

女「・・・自分の本当の顔が、本当は別なところにあるのじゃないのかなあ。とは、いつも、思う。」

こんな、こんな真っ白い、ウソみたいな顔は本当はわたしの顔じゃなくて、嘘の顔で、じゃあ、誰の付いた嘘なのだろうと、嘘なのだろうと、やっぱり、わたしの顔に付いているのだから、わたしの顔に違いないのだろうと、いう、結論になる」

救いを求めるように、鏡を見る女。

自らのほくろに触れる。

安堵する女。

女「(ややため息) ほくろに、触る。その黒は、何故だか、安心させてくれる。とても安心する黒だ。どんなに厚く化粧をしても、この黒の色は変わらない。薄まることも、滲むこともない。

唇の左の上の鼻よりちょっと下にある、ほくろ。

(嬉しそうにしかし、表に出し過ぎず) このほくろはきつと、私の本当の顔の一部なんだと、思っている。このほくろが本当の顔の一部。そう思っている。

それほど主張をしているわけでもない。ことさら大きいわけでもない。けれど、一度見たら、視線を外すことが難しい。こんなわずかな大きさで人の視線を釘づけにしてしまうのだ。本当の私の顔はきつと、とても魅力があるに違いない。たとえそれが、物語の特別な存在か何かのように、全身真っ黒の化け物みたいでも、それはそれで、私はその顔を愛するだろう。自分で自分のことを愛おしいと思えるなら、真っ黒でも構わない。ならば、と、一度顔を真っ黒に塗ったことがある。墨汁を頭からかぶったんだ。ホント、馬鹿」

自嘲気味に笑う女。

しかし、ややあって、自らの肌を見つめる。

女「・・・でも、肌の色は真っ黒にはならなかった。ただ、黒い筋がいくつもいくつも私の真っ白の肌をなぞっただけだった。

（喉の奥で笑って）日焼けもしない。赤くもならない。無敵の白だ。完璧な白。よほど強く、そこそ炎にでも直接当てて、焼いてしまわないことには色は変わらないのだろう。でも、たとえ火に焼かれたところでわたしの欲しい黒にはならない。ただ、茶色く変色するだけだ」

しばらく自嘲するように細かく笑う女。

一つ息を吸い、鏡に向き直る。

女「さて、と、考えてみる。

鏡の前で考えてみる。今日のメイクはあらかた落とした。よく見知る真っ白い顔が、明かりの消えた鏡の中の私の部屋の中に、ある。

薄暗がりでもよく見える。暗い場所にわたしの顔はよく映える。

目玉の黒目が浮いているように見えた。白目と瞼と肌の色の区別があまりない。陰影が付いているからかろうじてわかる程度だ。黒目とほくろと赤い唇が、白い肌に包まれてはつきりと見える。夜道で何度か見知らぬ人に驚かれたことがある。そりゃあ、驚くだろう。

では、と、考えてみる」

何かをバカにするように笑う。

女「このほくろも、黒目なのだと。錯覚することにする。

すると、わたしの顔には三つ、目があることになる。

動きやしないかな、と、思う。ほくろをまるで黒目のように動かしてみる。指で押さえて、すい、と」

女、ほくろに指をあててそのまま動かす。

動く、ほくろ。

目を見張って驚く女。

女「・・・意外と簡単に、ほくろの黒目は動いた。はじめのうちは、指でいくらかリードしなければならなかった。しかし次第に、自分の意思で、ほくろが動くようになっていた。

顔から首へ、首から肩へ、肩から腕へ腕から手の平へ。手の平からわたしはわたしの顔を見ていた。わたしの顔にほくろはなかった」

手の平を見つめ、自らのほくろを見る女。
ほくろも、女を見つめている。

女「(ひどくぼそりと) そうか、このほくろは黒目だったのか、と、思った。

じゃあ、この白い肌は？こんなにも白いのだから、白目なのだろうと、思う」

何かを堪えるように静かに笑顔になっていく女。

女「今の今まで、白い肌と置いていたわたしの表皮は何のことではない。ただの眼球の白目に過ぎなかったのだ。では、この唇は？この唇は唇の形をしているけれど、こんなにも赤いのだから、ひよつとしたら血管なのかもしれない。血管が唇の形になっているだけなのかもしれない。

よく、

揉んでみた。

指先で、

むにむに、

と」

ほどける唇。

女「ほどけた。

ほくろの黒目ほど簡単ではなかったけれど、唇は、たくさんの細い筋によって出来ており、指で、ほぐしていくとするすると、毛糸のようにほどけていく。

軽くだまになっているところを優しくそっと触ると、わたしの唇は唇としての形を失くして、唇は、幾筋もの、赤い、血管となった。血管は肌を這い、貼りつく。感触はあれに似ている。蜘蛛の巣に顔を突っ込んだ感じ。そんな、感触」

くつくつと笑う女。

急に雰囲気を変えて、明るく、乾いた声で、

女「黒目のほくろを動かしているうちに、目玉の黒目も動くのではないのかと思った。元々収まっている瞼の内側から少し助走を付けて飛び出してみる。右側に思い切り寄せて、思い切りよく、左側へ。えいっと、ジャンプするように」

飛び出す目玉の黒目。

女「(おちゃめに) 少し、飛び出し過ぎた。床に私の両方の黒目がある。

(声音を変えて) のを見ているわたしの顔は血管まみれで、黒目はほくろだけ。ほくろの黒目は床に転がったわたしの二つの目玉の黒目を見ている。

わたしの視線とわたしの視線が絡まっっている。

ああ、絡まっているのだ。

わたしの黒目はほくろで、ほくろは黒目で、唇は血管だった。

ああ、血管はいくつも、たくさん、の、赤い筋で、わたしの真っ白いウソみたいな、お面のような、もう、目玉の無くなった本当のお面のような、真っ白い、顔には今までわたしがわたしだと思っていたものなど、

さんがい、さえ残っていなかった。

(静かに、低く) わたしの顔はもうわたしの顔じゃない。この、三つの黒目がわたしなんだと、思った」

再び雰囲気を変えて明るく。

女「床の黒目は動かぬものかと、指でつまもうとした。

これが、存外怖かった。なにせ指で直接黒目に触れるんだ。それも、格好としては見上げている状態だ。迫ってくる指は思いの外大きく見えるもので、わたしはとっさに、黒目を逃がした。

右と左と、バラバラに動かしてしまったから、片方は壁に、片方はベッドの上にある。

どちらが右でどちらが左なんだかわからなくなってしまった。

そうか、思っているよりも簡単に動かせるようだ。試しにそのまま目玉の黒目を動かしてみる。瞼に収まっていた時と同じような感覚で」

部屋中を動き回る黒目。

女「二つの黒目は部屋中をぐるりぐると回っていく。その様をほくろが見ている。喉が渴

いたので冷蔵庫に行こうと立ち上がる。その前に、飲み物はあったかなあ、と、冷蔵庫の中に黒目を片方入れてみる。冷たかった。

(不満げに) 牛乳ぐらいしかない。でもこの時間に牛乳を飲むと、夜中にお腹がゴロゴロして気になって仕方がなくなるだろう。水道水を飲む気にもならない。仕方ないから、コンビニに行こうと思う」

ふと、疑問を感じる女。

女「さて、と思った。

このままでいいのか。
と」

女、自信に満ち満ちた様子で、立ち上がる。

女「逡巡は、一瞬。ひと瞬きする間もなく、いや、臉はもう関係なかった。

このままでいいや。

真っ白いお面のお顔の顔じゅうに、

元、唇の真っ赤な血管張り巡らせて、

目玉も何にもありやしない、人の顔だと見えもせぬ、

この、わたしのお顔のまま、ままにお外に出るとしよう」

ドアを開く女。

女「迷いなく、わたしはドアを開いた。

マンションの廊下は静かだった。眠っている眠っている静かに迷いなく眠っている。みんな眠ってる。

わたしは喉が渴いた。お酒でもいいかもしれないあとか、ぼんやり思いながら部屋を出る。

ハイヒールを、履いた。真っ黒い、ハイヒールだ。

コツコツと固い音のする、ハイヒール。

マンションの外に出る。ヒールがこつり、と鳴った。

夜風が、ああ、血管を撫でていく。

ふははは。気持ち悪い。

すごく気持ちが悪い。

夜だ。夜の気配は落ちている。そこいらじゅうに、落ちている。落ちているなんて表現はいつもはしない。単に夜だ、と思うだけだ。違うな、夜っていうのは単に時間の分類を示しているだけだし、行動の指針にするだけの単語だ。夜に帰ってくる。夜に出かける。夜にご飯を食べる。夜に眠る。だから、夜が落ちている、という表現は正しくは夜を表現していない。じゃあ、なんだろう。なんで落ちているんだろう。夜に、何が落ちているというのだろうか。

いつもと違ったように見える夜の街かど。
単純にいつも見ているのと角度が違うだろうか。それなら試しに黒目を元の位置に戻

してみる」

目玉を撫でる女。

女「・・・ああ、いつもと違ったように見えるのは角度のせいじゃないらしい。

（静かに）どこか高揚している。そうか、興奮だ。そう、興奮してる。脈打つ血管はわたしの肌の上にある。ドクンドクンという脈打ちが、肌に直接伝わってくる。知らず内にわたしはスキップをしていた。わたしはスキップが出来る人だ。おまけに黒目も動かせる人。唇がほどけた人。堪らなくなるぐらい興奮していた。落ちた夜の中で興奮する、女の、人」

楽しくて楽しく仕方がないという様子の女。

女「ははは。少し踊って見せようか。

ほら、踊れる。

ほら、こんなにも上手に踊れる。

あははは。

こつこつこつと、ハイヒールの踵がアスファルトを叩く。こんなに強くしたら、きつとこのハイヒールは悪くなってしまうだろう。

それなりに高かった。高かった、高い、踵のハイヒールの踵が、固いアスファルトを叩く。こんなに強くしたら、きつとこのハイヒールは悪くなってしまうだろう。両手を広げて、心赴くままに踊ってみせる。道路の真ん中の住宅街の真ん中だ。少し離れた路地の真ん中にコンビニの明かりが見える」

突然、何かに気が付く女。一変して無表情になる。

女「（やや緊迫感を持って）見ていたのは、どうやら大学生ぐらいの、男の子だった。その

男の子はわたしのことを凝視していた。紺色のスウェット姿は落ちた夜にはよく紛れてしまつて、気が付かなかった。

男の子は、どうにも大変驚いているようだった。

真っ黒な夜の上の真っ黒なアスファルトの上で高いハイヒールで高揚した心持ちで踊る、女は、確かに驚かれるかもしれないなあ。ああ、それに、わたしの顔は今、いろいろおかしいことになっているんだった。（物凄く小さく）・・・見えるかな？ 見えな

いかな？ よく見えるかな？ 見えないかなあ？

見えないだろうなあ。

見て、ほしいなあ。

そう思うのが早いのか、遅いか。

わたしは、黒目を二つ投げていた。男の子の顔がぐんぐん近づいてくる。まるで駆け寄っていくみたいに、まるでキスするみたいに近づいていく。体から上半身に、上半身から顔に、そして、あんまりにも驚いている男の子の目玉の中に、音もなく、入り込むわたしの、黒目」

周囲を見回す女。

女「なんて、表現したらいいんだろう。表現したらいいんだろうか。

だってほら、人の目玉の中の風景描写なんてうまくしたことないじゃない？そんなに経験のあることじゃないし。だからどうしても説明不足になってしまうのはしょうがないと思う。しいて言うなら、よくも知らない知り合いの部屋に入ったような気分に近いかもしれない。

そんな感じに似てる。居心地の悪さだ。だから、窓を探して、ゆっくりと開ける。うまいこと居心地を良くするためだ。

カチャリと、鍵を解いて、瞼を開ける。

わたしが、見えた」

少年の瞳から自分の姿を見ている女。

女の瞳から少年を見ている。

女「男の子の黒目にわたしの黒目が重なっている。

わたしの黒目が男の子の黒目を見てるのか、

男の子の黒目が、わたしを見ているのか。

そんなことはどうでも良くて、だって、黒目はどのみち一つに重なっているから、だったら一つの黒目に見られていることになるわけで、わたしはわたしのじゃない黒目を通してわたしを見ていた。

ひどく醜く見えた。そうか、他人の目から見えるわたしはこんなにも気持ち悪いのか。

わたしの姿は、まるで、悪い夢だ。

真っ白い顔のような何かが暗い夜道にぼっかりと浮かんで、そこには赤々しい血管がいくつも貼りついて、

ほくろが、

いつの間にか大きくなっていて、黒目のほくろが、一つ目の化け物みたいに顔の中心にある。

ほくろの黒目から見る男の子は明らかに怯えていて、わたしが近づくと男の子の目玉の中のわたしの黒目が震える。怖いものが近づいてくる。男の子は逃げたがって

た。びくびくと震えているのがわかる。わたしを見る目がわたしの黒目と一緒に震えている。震える視界の中で揺れるわたしはわたしが男の子に近づいていくのを見ていた」

女「ねえ」

と、少年に向かって声を発する女。

女「と、声を出したつもりだったのに、ただ唇が……ううん。唇だった血管が震えただけだった。

顔中の赤い筋がぶるぶると震えたのをわたしは見ていて、声が出る代わりに顔中が細かく震えた。

突然、がくと、男の子の視界が揺れた。彼は、腕を振り回しながら逃げ出したのだ。

男の子は住宅街を駆け抜けて、駆け抜けながら、何度も強く目をこする。視界一杯に男の子の指がぶつかって、わたしもそれにはさすがに驚いてしまつて、目玉の黒目を元に戻した。でも、顔の真ん中には大きくなったほくろがあつて、それはそれで素敵な顔だなあとか思つて、でも、もう瞼の位置もうまくわからない。には困つた。仕方ないからそのまま黒目だけ男の子を追うことにした。

男の子はまだ激しく目をこすりながら走っていたが、途中のコンビニに駆け込んで、店員に何事か伝えている。ぼんやりとした雰囲気夜の勤の店員は突然の出来事にぼんやりと呆然とした様子で男の子の話を聞いている」

ハイヒールを打ち付けている女。

女「コツコツと、固い音がするなと思つたら、踵を打ち付ける音だった。

ああ、

イライラしているんだなあ、と、思った。

（低く）なんで、逃げたの？

醜いから？でも、わたしにはその姿は見えない。確かに男の子の黒目から見えたわたしは正直気持ち悪かった。でも、今はわたしには見えない。見えないのに何で逃げたの？もつと見ればいい。醜いから、逃げたの？怖い？怖かった？

一回見ただけなのに？何度でも見ればいいのに？

そりゃあいきなり黒目を投げつけたのは悪かったとは思うけれど、そんなに出来ない経験をしたんだからむしろ喜ぶべきじゃないの？え？違うの？

真っ白い顔にぽっかりと空いた穴のようなおおきなほくろが、目に浮かぶ。わたしの本当の顔だと思った。赤すぎる血管が張り付いた顔は、あんなお面のようないのくさくさい顔よりもよっぽど魅力的だと思った。ほくろのある顔は魅力的だ。それとも魅力的な

のはほくろそのものなのだろうか？そうであって欲しいと思った。わたしのほくろはなんて魅力的なんだろう。

ほくろをそっと撫でる。わたしの細い指がちらりと見えた。滑らかでいつまでも触っていたいような、そんな肌触りだ。

キスをする時、男はこのほくろを見るだろう。キスをするべき唇がどこにもないことに戸惑っている彼に対して、わたしはこのほくろを押し付けるのだ。そうして、唇を震わせる。気持ち悪く震わせる。

そうして、逃げる。逃げる。・・・にげだす」

俯く女。

女「イライラしているんだなあ、と、思い出した。

わたしは、歩きだした。男の子はまだ店員に何かを伝えている。

「おんな」

「くろい」

「ばけもの」

そう、言っているのが、わかる。

ばけもの？

・・・ばけもの？

ばけものじゃないわ。

わたしは走った。コツコツと住宅街に響く、わたしの足音。コツコツと響く。コツコツと。走りづらい。

わたしはハイヒールを投げ捨てた。高かったハイヒールがアスファルトに転がった。走った。アスファルトは素肌に痛かった」

コンビニ前にたどり着く女。

女「コンビニエンスストアは明るかった。男の子は店内で半ば半狂乱のような様子で、口から唾とか泡とか吐き出しながら一生懸命に店員に何かを伝えている。店員は二人になっいて、他に雑誌の立ち読みをしている中年のおじさんが、いて、何かと男の子の様子を見ていたんだけど、窓の外に立つ、わたしの姿に気が付いて、ふふ。その顔が面白かった。そう、びっくりして、おじさんは雑誌を落として、後ろの化粧品棚の背中から突っ込んで気を失ったようだった。ずいぶん派手に倒れて、レジの方にいた三人が振り返る。

わたしはお店の窓ガラスに映るわたしの姿をゆっくりと眺めながら、ドアの方向に向かった。わたしの顔はもう、真っ黒になっていた。真っ白な部分はどこにもなくて、耳

も、鼻も、首も、全部、ほくろとおんなじ真っ黒になっていた。真っ黒に真っ赤な血管がドクンドクンドクンドクンと、脈打っている。残念ながら、手とか足とかはまだ白い。でも、いずれ真っ黒になるだろう。全身ほくろの黒に覆われて、とっても魅力的な黒になる。

嘘は黒くてホントは白い。でも、白は嘘で黒がホントだ。この黒は清廉潔白な黒で、白は真っ赤な嘘。だから唇は唇の形でいることを止めたんだ。真っ白いウソの顔に真っ赤な唇は、つまり嘘つきの温床となり得る。正直な気持ちを大切にすれば、このほくろが真っ黒で、わたしの顔を全部覆ったのも、唇がほどけて、言葉が聞けなくなったのも意味が分かる」

コンビニの扉を押す女。

女「（イライラとして）ガラス戸が閉まってる。鍵を掛けられた。さっきの男の子がわたしを指さして何か叫んでる。店員の二人は目を覆って、震えている。片方の店員は女の子で、女の子は両手でしっかりと、もう片方は男で彼は両腕で。見ていない。見てるのは、例の、男の子だけだ。でも、男の子も、もうわたしの方は見てなくて誰かに電話をかけた。始めた。わたしはガラス戸を叩く」

女、ひどく神経質に怒り、金切り声を上げる。

女「だからさあ、見てよ。わたしの顔をさああ、見なさいよ。見なさいよ。わたしの顔を見なさいよ！！！！」

ダメだ。イライラする。そうだ、わたしはイライラしていたんだ。イライラする。なんで見ない。イライラするなあ。ドアが開かないなあ。見ないなあ。見ろよ。わたしを。ああ、イライラするなあ！

目玉に付いていた黒目をガラス戸の隙間に滑り込ませる。そうして、店員のそれぞれの目玉の中に入り込もうとしたんだけど、めんどくさくなって、黒目を二つそのまま大きくして、二人の頭ごと黒目で飲み込んでみた。裏側で二人の店員の歪み切った怖がり切った顔が見えて、表側でガラス越しのわたしの姿が見えた。

二人の店員は混乱して頭を覆っている黒目を引き剥がそうとしたんだけど、そんな、そんな指を入れる隙間なんて、隙間、そんなの、どこにもあるわけがないじゃない。男の子が電話の先の誰かに向かって怒鳴り声を上げている。どうやら警察だ。

（嬉しそうに）大勢来るかなあ？大勢こればいいなあ。大勢きて、大勢きて、わたしのことで、本当のわたしのことを見て。見て、わたしもたくさん見てあげる。とっても近くで、くると、くるんであげる。わたしの黒目で。

そうだ、黒目は増やせないのかな。黒目がふたつとほくろだけじゃ、みんなを近くで見れない。それは嫌だな。キスをするように見たいんだ。いくつもの恋人が、わたしの顔に近づいてキスをする時。わたしのほくろをちらりと見たように、そうして、一瞬止まった目の前にある唇を、ちらりと、

ああ、そうだ。

今、舐めておこう。

血管を一本、一本とガラス戸の隙間に通していく。浮かすことは出来ないから、そんなSFみたいなことは出来ないから、丁寧にガラス戸の内側を這わせて、彼女と彼を覆うわたしの黒目の表面に張り付いて、ああ、滑らかだなあ。すべすべする。こんなにも綺麗な、わたしの黒目。みんな、みんなあああ、こんなのに触れたら、すごく気持ちいと思うんだけどなあ。思うんだあ。ふふふ。

黒目の中に血管を入れていく。わたしの中に血管が入ってくるみたいに見える。目の中に柔らかいものがいくつも入り込んでくる。わかる？わからないよねえ、この感じはねえ。ねえ、そうだよねえ。わからないよねえ、だって、みんな見ているだけで、わたしじゃないものね。

黒目の裏側で二人の顔はもう、何かを諦めきったような顔をしている。安心して、口から泡を出して、唾を吐いて。汚い。汚いけれど、愛おしい。愛おしいと思うのは、こんなに近くにあなたの顔があるからかしら？だから、ああ、舐めてあげる。血管の赤い先端が、二人の、唇に触れた」

突然の、オレンジ。

女「何？」

混乱で一瞬制止する女。

女「突然、弾けた、不気味なだいたい。

わたしの視界にオレンジの気分の悪くなるぐらい発色の良いオレンジ色が突然弾けた。なに？これ？

わたしの、黒目の片方がわたしの黒目が気分の悪くなるオレンジ色で、黒目の黒と混ざり合って、気色の悪いマール柄になっている視界から、男の子が、橙色のボールを振りかぶっていた。そうして、ばしゃりと、もう片方の黒目もオレンジになった。

え？ なに？

って思ってるうちに、雑誌の方で倒れていたおじさんが、備え付けのコーヒーマーカ―をコードごと引きちぎって、ガラス戸越しに、わたしに向かって、振りかぶっていた、のを、わたしは正面と、黒目のまだらにオレンジになった視界から、見ていた。

暗転